

【新刊紹介】

浅井優一『儀礼のセミオティクス：
メラネシア・フィジーにおける神話／詩的テキストの言語人類学的研究』
(三元社、2017年2月)¹

本書は、南太平洋のフィジー諸島ダワサム地域において、約30年ぶりに開催された最高首長の即位儀礼、およびその開催の是非を巡り地域を二分した政治的対立の顛末を、植民地期に作成された古文書、即位儀礼で為された儀礼的発話、地域の古老たちが従事する神話の語り、政府による儀礼の映像記録など、2年に及ぶフィールドワークで得られた様々なテキストの記述・分析を通して審らかにしようと試みたモノグラフです。以下では、本書が扱うフィジーでの事例を概略した上で、その主な論点を2点に絞り紹介したいと思います。オセアニア地域での研究に従事される皆様には是非とも一読して頂き、ご批判を頂ければ幸い至極に存じます。

*

フィジー諸島のダワサム地域では、28年間、最高首長が不在であった。その根底にあるのは、イギリス植民地政策下で作成された文書（『一般証言』および『氏族登録台帳』）が規定する各氏族の歴史と、神話の語りを通して伝えられる伝承の間の齟齬であった。ダワサム地域の古老たちは、この両者の間に生じた齟齬を正そうと試みてきたが、氏族間や氏族内部での対立や歪められた歴史への確執から幾度となく断念されてきた。こうした状況下、当該地域の一氏族であるヴォニ氏族は、自らが首長を即位させる義務を負った集団であると主張し、2009年頃から最高首長の即位儀礼開催の画策に乗り出す。そうした画策の中で、彼らが出会ったデライ氏族による神話の語りと、ヴォニ氏族が「文書以前」から受け継いできたとする神話、この両テキストに一貫した等価性が認められ、氏族の正統な来歴と系譜が解き明かされることになる。この両氏族の神話的邂逅が契機となり、長年放置されてきた即位儀礼が執り行われる機運が広まった。デライ氏族の長老は、著者に対し、即位儀礼の開催の意義を次のように伝えている。「おまえは、祖先神が話す、とは何のことか知っているか？これは上から降りてきた啓示である、上にあるかつての村から、私たちが、その道に沿って進むために。」そして、フィジー政府の地方知事を交えた会議においても儀礼の開催が承認され、この啓示の通り、儀礼の過程は、神話の構図に沿う形で、植民地期の文書に反する仕方で行われた（2010年4月）。儀礼の一部始終は、フィジー言語文化研究所の役人によりビデオ映像として記録され、100分程度のDVDとしてアーカイブ化された。

¹ 書誌情報 <http://www.sangensha.co.jp/allbooks/index/423.htm>

以上の通り、本書は、A. M. ホカートの王権論やマーシャル・サーリンズによる構造歴史人類学の試み以来、オセアニア人類学の中心的な研究課題をなしてきたフィジー諸島における儀礼、神話、歴史といった事象を扱っており、その上で、本書は、言語人類学および記号論の視座から切り込んでいる。特に、レヴィ＝ストロース構造人類学に理論的基盤を提供したローマン・ヤコブソンの詩的言語に纏わる洞察とチャールズ・パースの記号論を融合的に発展させた言語人類学者マイケル・シルヴァスティンの儀礼コミュニケーション理論を参照軸とし、フィジー語で書き起こしたテキスト（植民地政府の文字資料、古老による神話の語り、公的会議の談話記録、即位儀礼での定型的スピーチ、儀礼の映像記録など）を、その叙述形式や形態論的特徴から丹念に記述することを通して、神話と歴史が儀礼を契機に生起し絡み合うことを詳らかにしている。そして、言語使用の綿密な考察を民族誌記述の中心に据えることを通して、文化研究と言語研究の接合を可能にすると同時に、サーリンズの認識論、ニコラス・トーマスの歴史人類学やポストコロニアリズム、さらにマリリン・ストラザーンのメラネシア人格論、およびそれを柱の一つにして広がった存在論的人類学の連関を、ヤコブソンやパースの記号論に依拠して体系的に捉え直している。

また本書は、19世紀フィジーの英領植民地期の公文書の記述形式と調査地域での古老が従事する神話的語りの叙述形式を比較対照し、前者が氏族集団の連合としての地域を、首長を頂点に据えて「階層的」に記述する形式（ハイポタクシス; hypotaxis）を有するのに対し、後者は「並列的」に叙述する形式（パラタクシス; parataxis）をもつことを明らかにし、そうした神話記述のスタイルの相違が、社会秩序の生成に関する記号論的な変遷に基づくものであることを指摘している。さらに、政府の文書と土地の神話の齟齬に疑念を抱く氏族集団が、その齟齬を正そうと画策する中で、集団各々が受け継いできた神話の断片に整合性を見出し、氏族の正統的な来歴と系譜を解き明かす様子、および古老たちが地域の原初の姿として理解した神話を象った即位儀礼が実行され、植民地期以降、文書が規定してきた社会秩序の覆しが図られる過程を、儀礼的発話や儀礼における時空間の構成に関する分析に基づいて詳らかにしている。以上を通して、本書は、ミクロな政治的対立に焦点を当て、それを通じて創出される現代フィジーのマクロな文化的秩序の史的変容を明らかにしながら、この両者を統合しうる理論的枠組みの提示を試みている。

（著者）